大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十四卷　第四號

昭和二年四月一日發行

論叢

古代の港……教授　文學博士　三浦周行

倶樂部稅論……教授　法學博士　神戸正雄

ミルの經濟學概念……講師　文學博士　米田庄太郎

歷史學派の先驅者としてのリチヤード・ジョーンズ……東北帝國大學教授　經濟學士　堀經夫

時論

日本の對支好意政策の下界……教授　文學博士　矢野仁一

海軍制限に關する米國の提議……教授　法學博士　末廣重雄

說苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論……教授　法學博士　田島錦治

產業としての林業の本質……教授　林學經濟學士　平田憲夫

パンタレオニと經濟學基礎概念……經濟學士　松岡孝兒

雜錄

印度の雨……教授　法學博士　財部靜治

（禁轉載）

パンタレオニと經濟學の基礎概念

松岡孝兒

一

こゝに取扱はんとする對象は、經濟學に於けるパンタレオニの理論的方面のみに限る。他の方面例へば應用經濟學、財政學等に關しては今は觸れない。勿論、それは彼れが此等の方面に注目すべき理論の發展を試みなかつたといふわけではない。唯理論的に見て同一のオリヂナルを有たす、また其の影響するところも同一でないと考へるからである。しかし尙ほ嚴密に云へばこゝで問題とするのは其の理論的方面の一部ではあるが、しかし最も重要なるものゝ一と考へるところの、卽ちパンタレオニが彼れの理論經濟學の基礎概念を如何に構成し、如何に展開せしめたかといふことである。この點について興味あるのは一八九七年十月二十三日、彼れがヂュネーヴ大學に於て試みた『經濟學者間に於ける主張の相違に關する特質に就いて』(Del carattere delle divergenze d'opinione esistenti tra economisti) といふ講義の冒頭の言葉である。彼れはいふ。

『自分は諸君が、如何なる經濟學派に私が屬して居るかと尋ねることゝ思ふ。このことは經濟學者に對していつも提出される問題である。實際、經濟學者に就いて論ずることが恰も藥局に於ける藥品のやうにできるならば、隨分便利なことである。これは加里臭化物であるとか、あれは

重炭酸曹達であるとか、これは正統派經濟學者であるとか、あれは社會主義經濟學者であるとか、或は歷史派であるとか、數理派であるとかいふやうに。……もしも其の主義が與へられたとすれば、すべてのものは恰も一の原理からその必然的歸結を得るやうにこの主義から割り出されるから、もはや他の新しい主義を必要としない。私は如何なる學派にも屬するものでない。私の藥局から出すものは平凡ではあるが一つしかない。諸君はまた私が經濟學者に學派なるものがないといふことを述べたなら驚くことであらう。これはまた、經濟學を識つて居る學派と識らない學派との二つしかないといふことゝ同じことである……」。*

この謎はいつたい如何に解すべきであるか？　蓋し此等の言葉に對する見解の如何によつて、こゝに問題とするところもまた自ら了解せられるからである。パンタレオニの經濟學に於ける基礎概念に就いては、ロリヤによつて私は已に、大凡の傾向、卽ち初期に於てはリカアドの學說に私淑し、其後メンガアのそれに移り、後年に於てはまた漸次リカアドに復歸し來つたことを述べた。** しかし實際その通りであるかどうか？　私はこゝで問題を更に限定することにより、卽ちその吟味をば彼れの基礎的概念の展開の後半期、卽ち一八八九年純粹經濟學原理 (Principii di economia pura) の發表後に限ることにより暫く研究をすゝめてみたいと思ふ。彼れの純粹經濟學原理は一八八九年に初版を一八九四年に第二版を出したが、其後、增版されなかつた。後年、彼れは更に新に原論を發表するの意思を有つてゐたらしかつたが遂に之を見るに至らず、從つて一八九四年後の彼れの經濟學に就いては、彼れの殘した論文集其他を通じて之を窺ふことを得るに過ぎな

* Pantaleoni–Erotemi di Economia 1925. vol. I. P. 157.

** 拙稿：パンタレオニ氏業績の回顧(本誌第二十一卷第一號)

い。以下私は、便宜上まづ彼れが所謂主觀學派と客觀學派とに對して如何なる交渉を有つてゐたかを述べ、次に均衡學派卽ちローザンヌ學派との關係を解剖して見やうと思ふ。

二

先づ主觀學派卽ち墺太利學派と彼れとの關係を見る。彼れは此の學派に對しその純粹經濟學原理に於て苛辣な批評を加へてゐるが(例へばベーム・バウェルクは獨墺以外のことは全く知つてゐないと述べたるが如き)、實際その構想及構想の基礎に於ては多くの類似を有つ。純粹經濟學原理の機構に於ける軸心は限界效用の理論である。彼れがこの理論を感覺に對する鋭き分析による法則から出發せしめ、墺太利學派と同樣、その最も大なる優位を主觀的價値に與へて居ることは、何人も疑はざるところである。しかし乍ら他方に於て此等二者の間に相違がないといふわけではない。就中、最も注目すべきはパンタレオニが限界效用說をば本質的に認めて居るにも拘らず、之に對し墺太利學派が與へたやうな改革的な重要性を與へなかつたといふことである。墺太利學派は今日極めて廣く認められてゐるやうに、價値に關する主觀的な見方からする限界效用の理論を基礎とし、經濟學をばこの全く新しい基礎の上に建設して、從來の古典派經濟學なるものをば全然地に委してしまはうとする立場をとつて居るに反し、パンタレオニは之と異り、その純粹經濟學原理に於ける理論的展開は啻に主觀的價値に優位を與ふるのみではない、更に古典派經濟學の生產費說をも其の中にとり入れんとするものである。* 彼れの生產費說に對するこの關心はその純粹經濟學原理に於てのみではない。前揭『經濟學者間に於ける主張の相違に關する特質に

* Pantaleoni–Pure Economics translated by B. Bruce 1898 London. p. 165.

就て』といふ論文中に於ても亦、リカアド經濟學から現代の經濟學への進歩は一の進化であるとし、リカアドの理論は今日もなほより擴張されたる限界及び細部の修正によつて存在すると論じてゐる。*

彼れはかくの如き點に於て主觀學派と客觀學派とを折衷的に取扱つてゐる、即ち二學派を統一綜合することによつて其の經濟學の基礎概念を構成せんとするものである。然らばその綜合は如何にして行はれたか？　純粹經濟學原理に於ては如何？　其後に於ては如何？　以下順次その跡を辿らう。蓋し私の見るところによれば、純粹經濟學原理に於ける彼れの客觀學派學說の採用は、全然特殊なる見方によつて行はれて居り、從つて此の點に於て愼重な吟味を加へなければならぬし、純粹經濟學原理の後に於ては、彼れの基礎概念は著しく經濟的均衡說に傾いて居り、かくすることに於て彼れが客觀學派に接近してゐるからである。この後の場合に就いては私は之をローザンヌ學派との關係に於て述べることゝし、以下主として純粹經濟學原理に於てパンタレオニが客觀學派就中リカアドの經濟學を如何に取扱つたかを述べる。

三

純粹經濟學原理に於ける彼れの古典學派に對する關係は、大體に於て恰も墺太利學派に對する場合と相反するやうに思はれる。即ち表面的には古典學派の說を採用して居るが事實はさうでない。彼れが價値論に就て此等兩學派に對してなせる大膽なる綜合の中に、主觀學派に對してはその限界效用說をそのまゝ採用して居るにも拘らず古典學派に對してはその價値說にある修正を試

* Pantaleoni–Erotemi di Economia vol. I. p. 170.

みた上に於て墺太利學派に對立せしめて居るが如きこれである。

今、價値決定に就いて古典學派就中リカアドは如何に考へてゐるか？　またバンタレオニはリカアドのこの考をば如何なる視角に於て見、また如何なる修正によつて、彼れ自らの價値論にとりいれてゐるか？

端的に云へば、リカアドは『貨物の價値を左右しなければならないものは、生産出費であつて、供給と需要との比例ではない』*とのべ、貨物の價格が、供給の需要に對する比例若くは需要の供給に對する比例によつて定まることを以て誤謬であるとし、價値の決定は貨物の生産に費された勞働量の多少によつて定まるといふ。

バンタレオニはこの說に對し純粹經濟學原理に於て曰ふ。**價格は『需要と供給との關係による。詳しく云へば『交換價値卽價格は需要と供給とにより定まる。需要なる言葉によつて連續的に增減する財の限界效用の尺度を示し、また、供給なる言葉によつて任意に賣り放ち得るさういふ財の分量を意味するならば、吾々は需要が增加すれば價格は騰貴し需要が減ずれば價格は下落する、……同樣に……需要がそのまゝであるとし供給が增加する時は價格は下落し、供給が減ずる時は價格は騰貴するといふ』。卽ち『價格は(a)商品の連續的分量に對し、與へられたる時及び場所に於て存在する效用の大さと、(b)かゝる時及場所に於て任意に處分し得る財の分量によつて決定せられる。換言すればこの二つの要素が最も近いまた充分な決定要因である』と。卽ち彼れはリカアドの供給方面のみを重視するに對し需要にもまた等しく重心を置くべきことを力說

* Ricardo-Principles of P. E. and Taxation p. 373. 堀學士譯本 334頁、

** Pantaleoni,-Pure Economics. p. 164-165.

してゐる。

更にまた、生産費なる言葉についてリカアドとパンタレオニとの考を見るに、まづリカアドは彼れの原論に於て次の如くいふ。

『すべての貨物――それが製造品であらうと鑛産物であらうと、土地の生産物であらうとを問はず――の交換價値は常に……最も不利なる事情の下に於て、それ等のものを生産し續くる人々によつて其生産に必然的に費された勞働によつて左右されるのである』*と。

之によつて極めて瞭なる如く、リカアドの說く生産費は、その貨物を生産するために費消された勞働によつて示される客觀的最高生産費である。卽ち需要者側の主觀的評價又は消費者側の效用でなく、生産者が最も不利なる狀態に於て生産するに際し費消せる勞働に於て說明せられる。

然るにパンタレオニは生産費を以て『財を得るために受くる犧牲又は苦痛』の意であるとし、『この犧牲は種々の形を示す。例へば、狹義に於ける勞働、用心深い注意、豫見、直接享樂に對する節欲等であるが、經濟學的に云へばかういふ形はどうでもいい。それ等はすべて勞働、費用、苦痛といふやうな概念の下に含まれる』**とし、生産費をば極めて廣き意味の勞働なりと解してゐる。

彼れは生産費なる言葉をかく意味することにより、更に一轉して此の意味の生産費と限界效用とは同一であると論じ、此意味に於て生産費をば限界效用と共に價値論にとりいれてゐる。例によつて之を示せば次の如くである。食物の欲望に伴ひ增減する連續的な苦痛の段階があると假定

* Ricardo-op cit. P. 150. 堀學士譯本 99頁、
** Pantaleoni,-Pure Economics. P. 165.

し、與へられたる欲望に應ずる財の基準分量があるとする。今、その食物の欲望に就いての段階が八個ありとし、これに應ずる八個の增加分がありとする。此の場合第八增加分の效用は、もし其持分に更に第八增加分を加へるとすれば、此の第八增加分を有つて居る人が之を失ふことによつて生ずる苦痛か又は第七增加分を有つて居る人がこの第八增加分によつて得る快感によつて測定される。卽ち何れの場合に於ても其の效用は欲望の第八段階に應ずる快樂的分量に等しく、そしてそれはまた快感又は苦痛の何れの言葉でも言ひあらはされ得る。

次にまた財の增加分の獲得には種々の程度の苦痛があり得るけれども、其の效用の尺度たるものは、其苦痛の最少單位でなければならないと說き、再轉してこゝに效用と生產費とが同一であるといふ點に論及して次の如くいふ。

『であるから、もし一物又は同質的なるある分量、例へば前にのべた食物の第八增加分といふやうなものが勞働の基準分量例へば二時間の勞働によつて得られるならば、その二時間の勞働——或は寧ろその二時間が齎す犧牲——は其增加分の效用の尺度となる。此の意味に於て生產費は效用と一致する。從つてもし、一物が他物の犧牲によつて獲得されるならば、吾々が犧牲とする其の財は他の財の費用又は價格となるものであつて、こゝに財の費用は其の財の最終費用と一致する』と。*

以上述べたるパンタレオニの考を要約すれば、凡そ苦痛と快感とは同じものであり、エドニストは勞働によつて受くる苦痛と勞働によつて生產される財から與へられる快感とが相等しき時に

* Pantaleoni, op eit, P. 171. 以下

於て、その勞働を中止することゝなり、またかく解することに於て生產費と效用とが相等しきことゝなる。從つて生產費は效用の最終段階を說明するための別稱であるといふことになり、效用に對してなされるすべての提言はまた同時に移して生產費にあてはめられる。

かくの如き見方に於て生產費の意味は、リカアドとパンタレオニとの間に於て相異り、從つてパンタレオニの用ひて以て效用と同一なりと解せる生產費は、上述せる如き主觀的苦痛費用であり、この測定が消費者に於てなされると解する限りに於て、リカアドのそれとは峻別されなければならぬ。*

凡そ理論上、生產費と效用との概念に對し、同時に供給と需要との條件の下に綜合せんとせる努力は今日迄決して尠しとしない。しかしながら、かくの如き場合に考慮すべきは其の努力の目標が發展的に見て生產費、效用の兩學說の調和にある限り、生產費と效用との概念に對して特定の意味を與ふることによつて兩者を統一せんとするよりも、寧ろ此の兩者の調和的機構を試むることに、より認むべき點があるのではなからうか？　例言すれば、パンタレオニの如く生產費をば效用の同義語と解し、生產費の內容に對して古典學派傳統の古酒を捨て、之に代ふるに强ひて主觀學派の新酒を盛らんとするよりも、生產費と效用とを以て其の本質に從ひ相異れる二要素とし、此の兩者が價値決定に於て恰も鋏の兩刄の如く作用すると見るが如き關係にたつ考が選ばるべきではなからうか？　要するにパンタレオニの此の點に就ての論理は極めて鮮かであるが、しかしその內容に至つては深き反省を伴はざるを得ない。

* 同樣の混同は、Pure Economics. P. 188. にも亦あらはれてゐる。

四

最後にパンタレオニはローザンヌ學派卽所謂經濟的均衡學派に對して如何なる關係にたつかを見やう。

彼れと廣義に於けるこの學派との關係は、啻に彼れが此の學派の人々に師弟關係を有つのみでない。彼れ自身も亦、此の學派の基礎概念たる經濟的均衡に特種なる關係にたつものである。經濟的均衡の思想は已に純粹經濟學原理に於ても取扱はれてゐるが此時代に於ける彼れの經濟學の中心問題は限界效用說にあつたことは已にのべた如くである。然る　其後に於て彼れの經濟學の中心は漸く經濟的均衡說を重要視し來り其の限りに於て限界效用說に與ふる優位は漸く其濃さを薄めてゐるやうに思はれる。經濟的均衡說に對する彼れの見方は、四つの立場に於て行はれてゐる。其の一は此說を以て經濟學の絕對的基礎概念なりと見る立場に於て觀察するものであり、其の二は之と反對にかくの如き立場を否定するものであり、其の三はこの概念が結局效用說と同一の結果に歸するものと見る立場であり、最後の第四は此の說が生產費の理論と一致すると見る立場である。

まづ第一の見方、卽ち彼れがこの經濟的均衡說を以て他のものに對し絕對的價値を認むる所以は、效用や費用の如きものは經濟的均衡の決定に關係し來る多くの條件中の一の要素に過ぎないと見るからである。* 彼れはこの見地からワルラス、パレト、マーシャル、エッヂウォース、フィッシャーをば最も卓越せる經濟學者としてあげ、之に反してヂェヴォンス、メンガアに對しては

* Pantaleoni–Erotemi di Economia. 1925 vol. I. P. 201.

僅にリカアド學派の人々と共に經濟學の先驅者としての名譽を與へて居るに過ぎない。結局この見地に於て彼れは、經濟的均衡が經濟現象の認識の上より見て最も多くの要素を含んでゐるといふ點から、換言すればこの理論が經濟的機構の複雜と多方面とを說明するに最も適當であるといふ點から、之を以て經濟學の絕對的基礎概念と見てゐるといふべきである。

然るに彼れはまた他の方面に於て、效用說の重要を說き均衡學說に批難を加へてゐる。* 卽ち彼れは均衡學派の大成者と目さるゝパレトの死に際しての回想錄に於て、パレトが一八九七年の經濟原論 (Cours d'économie politique) に於ては心理學的研究を採用して居るに拘らず、其の後經濟要論 (Manuale di economia politica) に於ては全く之を捨て去つたことを批難し、更に、經濟的均衡說が效用說に比し、より多く　要素をとり入れて居ることにより、すべての複雜なる經濟的現象の相互依存關係をば表現してゐることは認むべきであるが、しかし機械的均衡の考より出發して慾望 (goût) と之を妨ぐる障碍 (obstacle) との相調和　、相平均するところに均衡點を見出す此の均衡の思想を中心に置く經濟的均衡の見るところは、畢竟、表面的な現象形態のみであつて更に深くその現象の因つて來る因由を說明し得ない。之に反し效用說は最少の努力によつて最大の效果をあげんとする個人心理にその前提を置き、この極めて明瞭なる事實より出發して、『何が故に』といふ經濟的活動の本質を諦視せしめるものであり、此の意味よりしてよりよく今日の經濟學の傾向の認識に妥當して居ると論じてゐる。

第三の場合、卽ち彼れが均衡說と效用說とが完全に近き一致に歸するものであるとの考は、『經

* Giornale degli economisti e rivista di statistica, gennaio-febbraio, 1924.

濟學史研究を必要とする理由について』*なる論文に於て觀取せられる。それによればもしも經濟學を以て力學の示す學說の如く組みたつる時は、價値概念の表現は卽ち力である。それで經濟學を以て價値の學として體系づけるならば、快感を最大にし苦痛を最少ならしむる欲求によつて其の經濟的活動を營む人々は、一の均衡點卽ち快感と苦痛とが相均衡する迄その運動を繼續する。從つて正しい意味に解せられる快樂主義は、その效用によつて常に均衡を見出すものであり、この意味に於て效用說と均衡說とは不可分と見るものである。

最後に第四の經濟的均衡が生產費の理論によつて說明せられるとなす考へ方は、論文『經濟學の定義』**にあらはれてゐる。それによれば、經濟的均衡と價値論とは同じものである。唯經濟的均衡の理論が發展する以前に於てこの均衡の思想は正常價値によつて、正常價値は生產費によつて說明されてゐると見るものである。このことは卽ち、生產費の理論が經濟的均衡を決定すると見ることができやう。

以上四つの場合を見るにまづ最も注意を要するは、第二のパレトになされたる批難である。しかし、彼れがこの經濟的均衡說に對し效用說の重要を主張したことは、所謂經濟的一般均衡學派に對して加へられたる批難であり、示唆であつて、之を以て彼れが全然經濟的均衡を否定して居ると斷言するを得ない。彼れが論文『若干の經濟動態現象について』***に於て、均衡現象と共に不均衡の現象をも認めたのは、卽ち彼れの立場がパレトの如く經濟現象をばすべて均衡狀態に置き得るものと見ると異り、經濟現象中には(a)結局始めの均衡又は始めのに近い均衡に回歸し來る現象

* Dei criteri che devono in formare la storia delle dottrine economiche (Erotemi di economia. vol. I. p. 244.)

** Definizione dell'economia (Erotemi di economia, vol. I. P. 2.)

*** Di alcuni fenomeni di dinamica economica. (Erotemi di economia, vol. II. P. 91.)

と、(b)結局、連續的な動搖卽ち無制限に不均衡を續ける現象とがあると見るのであつて、此の第二の動態事實が經濟現象を究むる上に重要なる位置を占めて居り、從つて、彼の考によれば、その經濟的均衡はマーシャルの如く經濟的特殊均衡に屬するものであり、換言すればその均衡をば經濟現象のすべてに應ぜしめんとするものではなしに、ある特殊なる場合に於てのみ——それは需要供給の關係の如き重要なる場合のものであることは勿論であるが——經濟的均衡が成立すると見るものである。從つて實際、全然、均衡說を排するものであるとは云へない。否、寧ろ特殊的ではあるがこの經濟的均衡の概念こそ、純粹經濟學原理發表後に於ける彼れの經濟學の基礎概念でなかつたか？

以上述べたところにより、パンタレオニの經濟的均衡學派に對する見方四つのうち、その否定說の立場が說明せられたとすれば、後の三つの場合は結局、第一の見方によつて代表せられ得るといふことは、極めて容易に首肯せられる。卽ち第一の經濟的均衡が單に效用や費用によつてのみでなく、これらのすべてのものを要素として成立するといふ立場にたつ點に於てである。第三の效用說より見るもの、第四の生產費の方面より見るものも、夫々に存在理由はないとは思はないが、結局に於て第一の場合の一面的考察としてのみ其價値は認められるに過ぎないと思ふ。

畢竟ずるに、パンタレオニは、其純粹經濟學原理に於て認めはしたが、しかし、其重要さは限界效用說を去ること極めて遠かつた經濟的均衡の思想をば、ある制限の下に於て其後に於ける彼れの基礎概念としたことは否むべからざる事實であると思ふ。

五

以上に於てパンタレオニの理論經濟學の基礎概念が純粹經濟學原理を發表した時代、及其後に於て如何なるものであつたか、また其の基礎概念が古典學派、限界效用學派及經濟的均衡學派と如何なる交渉を有つたかといふことの大體を述べた。顧みて冒頭、一八九七年の彼れの言葉即ち、『經濟學者には學派なるものはない。それは經濟學を識つて居る學派と識らない學派との二つに歸着する』といふことは如何に解すべきであらうか。

或は經濟的機構の如何に就いて、彼れが古典的理論と維持しやうと或は均衡の理論を認めやうと、彼れが眞に認めたところのものは一の快樂主義的經濟學あるのみであるとし、彼れを以て主觀主義經濟學說によつて經濟學說を統一せんとするものであるとする論者がある（ヂード、*殊にビルー**の如き）。此種の論者はいふ。パンタレオニについては彼がかくあると信じたことゝ、實際彼れがかくあつたことゝは之を區別するを要する。彼れ自身は各學派を綜合統一すべき者でありたいと思つた事は事實であるが、然し彼れの實際は快樂主義的經濟學を奉ずる學徒であり、彼れの經濟學の長所も弱點も皆こゝに其の萠芽を見出す。彼れの經濟學說は彼れの理想が各學派の綜合統一にあつた關係上其の原形に對する歪度甚しく、例へば純粹經濟學原理に於て效用と費用との一致を說かんとして、費用なる言葉に對し主觀的苦痛費用の如きリカアドと全く異れる內容を與へたるが如き著しき點である。また彼れが多くの學說をばあらゆる手段を盡して接近せしめんとした結果は、純粹經濟學原理の後に於て經濟的均衡學說に著しく接近したけれども、これによつてパレトの如く全然快感及苦痛に關する主觀的究硏を拋棄するに至らず、寧ろパレトが『畢竟、適慾性の最終段階に於て價値論にのみ沒頭するは經濟學の爲め重大なる契機ではない。經濟

* Gide et Rist-Histoire des doctrines économiques. 1920. P. 620 et s.
** Revue d'économie politique. sep.-oct. 1926. P. 1163 et s.

的均衡こそ一般に研究さるべきものである』といふと異り、彼れの考は將來の經濟學は均衡論と共に均衡の由つて來る本質的の研究を主觀的學說によつて求め其の點に於て始め成立すべきものであると。

然しながら、またある論者(デル・ヴェッキヨ、リッチ、ロリヤの如き)*は、彼れが經濟學者に學派なしと云つたのは、勿論彼れの折表的經濟理論によつて經濟學を統一せんとするものであり、實際また彼は極めて卓越せる綜合論者であつたと論じて居る。此點から彼れの純粹經濟學原理を見る時はそは明に失敗である。しかし其後に於ける經濟的均衡への接近は如何であるか。彼れの論文集 Erotemi di Economia にあらはれたる均衡の思想はリッチの云へる通り其の內容全く單一でない。よく各學派の長所をとり短所を捨て、より高き意味に於て經濟學理論の綜合を試みて居り、その綜合的方面になしたる功蹟は重要視さるべきであると思ふ。

かく解する上に於て、パンタレオニの最後の經濟學の基礎概念が均衡論にあるは疑ふべくもない。而かも極端に經濟的一般均衡論に走らずして、特殊均衡論に止まることによつて巧みに古典學派の生產費說と墺太利學派の效用說とをとり入れ、これによつて一般均衡論の受くる批難の最も重要なるものを免れてゐることはまた其の折衷論の長所といはなければならぬ。

パンタレオニに就ては、尙ほ記すべき多くのものがあるが、彼れが驚くべき銳さを以て經濟的活動の主觀的方面卽吾々の心理作用についてなしたる解剖、並に、あらゆる學說の長所をとり入れて綜合的に彼れ自身の經濟學を打ちたてんとした事は、其內容と共に綜合主義にたゝんとするものは勿論其他の人々にとつて省察利用すべき多くの示唆を與へる。

* Giornale degli economisti, marzo e aprile, 1925. 參照。